
ちいさな家

50まい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちいさな家

【Nコード】

N4425N

【作者名】

50まい

【あらすじ】

やさしい家と、ちいさな女の子のお話。

やさしい家と、ちいさな女の子のおはなし。

むかしむかし

小さな森の小さな丘の上にちいさなお家がありました。

そのお家にはひとりの女の子がすんでいました。

女の子はピンクが好きで、その家は中のお部屋も、外の壁もピンクでした。

家も女の子が好きなピンクを気に入っていました。

家は女の子に話しかけます。

「ひとりでさみしくはない？都に行けばたくさん人間がいて、いろんな楽しいことがあるんだよ」

「ううん。さみしくなんかないわ。家さんがいるから、わたしは一人なんかじゃないもの。都に行かなくても毎日楽しいわ」

女の子の答えを聞いて、家は女の子のためには都に行った方がいいと思いつつもほっと安心しました。家は動くことができないので、女の子が都に行ってしまうは一人ぼっちになってしまうからです。

そんなある日、ちいさないえに都からおふれが届きます。

「どうしたの？泣きそんな顔をして、なにかあったのかい？それにそれはなんだい？」

「これは、ペンキよ。家の壁は、黒に塗らなければいけないのですって」

「..」

「そういつきまりだからよ」

そう言うと女の子は、壁にペンキを塗りだしました。

かわいらしいピンクの家が、真っ黒に変わっていきます。女の子はぼろぼろと涙をこぼしながらペンキを塗り続けました。

家は、とてもとても悲しい気持でした。

決まりって何だろう。

どうして、好きな色のままじゃ駄目なんだろう。

人間の世界のことなどよくわからない家は不思議で不思議でしょうがありませんでした。

そして、ちいさなピンクのお家は、真っ黒に塗り替わりました。

5

黒いお家は、時折身震いして黒のペンキをばらばらと落とします。

そうすると女の子が悲しそうな顔をするので、そんな顔は見たくないとは思っていますが、たまにどうしても我慢が出来なくなりそうしてしまいます。

「ああ、また、ペンキを塗りなおさなければいけないわ」

「どうして。そのままでもいいじゃないか」

「だめなのよ。見つかったら大変なことになるわ」

「でも、最近きみはあまり笑わなくなった」

「そんなことないわ」

そう言って女の子は笑います。でも、家は女の子の笑顔が前と違っていると気づいていました。

どうしたら女の子が心の底から笑ってくれるのだろうかと思案を考えます。

そうすると、どうしても家にできることは、自分に塗られたペンキを落として前のようなピンク色の壁に戻してあげることだけだと思

ってしまつのです。

ある日。小さな家とちいさな女の子が住んでいる森に地震がきました。

がたがたと長い揺れは家を傷つけて去って行きました。

「まあ！」

女の子が外に出ると、何と家は黒いペンキがすっかりはげてしまい、女の子の大好きだったピンク色の壁に戻っていました。

傷ついた体で家は思います。

よかった。これでもう一度、女の子の笑顔が見れる。と。

けれど、女の子は、その家を見た途端泣き崩れてしまったのです。

家は驚きました。どうしたの、泣かないでと声をかけて必死で慰めました。

「どうしたの。嬉しくないの？きみの好きなピンク色の壁だよ」

「ええ嬉しいわ家さん。わたしの好きなピンク色の壁が見れてうれしー」

「じゃあなぜ泣くんだい？嬉しいのなら、泣かないでくれ」

「家さん家さん。わたしはとっても嬉しいの。でもね、その分だけとっても悲しいの。だって、家を黒くしなければいけないのは決まりなのよ。いくら悲しくても、つらくても、絶対にそうしなければいけないのよ。いま、ピンク色の壁が見れても、また、塗りなおさなければならぬわ。塗りなおすたびに、わたしの好きなピンクが黒く変わっていくのを見るたびに、わたしはととても悲しくなるの」

「じゃあ、もう、黒に塗らなければいい」

「それはできないわ。そういう決まりだからよ」

家にはやっぱり女の子の言ってることが分かりません。

好きなら好きで、こころのままに動けばいいのに、女の子は好きなのだけではだめなこともあると首を振るのです。

9

「それに、そうやって黒いペンキを落とすたびに、家さんが傷つくわ」

「きみが笑ってくれればいいわ」

女の子は笑いました。とてもとても寂しそうな笑顔でした。それを見た家もとても悲しい気持ちになりました。

家は、ほんとうに、女の子に笑ってほしかっただけなのです。

次の日、女の子はまた、町で黒いペンキを買ってきました。

それを、ピンクの壁を惜しむかのようにまる一日かけて塗りました。

家は何も言いませんでした。

女の子の言っていることはよくわからないのですが、ピンク色の壁を見た女の子の寂しそうで、悲しそうな泣き顔をもう二度と見たくないと思ったからでした。

ピンクが見れてうれしいと言った女の子の言葉は本当でしょう。でもそれ以上に、女の子がピンクを好きであればある程、べったりと上塗りされた黒をみたときの悲しみが2倍にも3倍にもなってしまうのです。それが家にもわかりました。

ただ、ただ家は女の子に喜んでもらいたかっただけなのに。

家の壁は真っ黒に戻りました。

それから、もう、黒いペンキがはがれることは二度とありませんでした。

やさしい家と、ちいさな女の子のおはなし。

(後書き)

そうして人は偽りの中で生きる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4425n/>

ちいさな家

2010年10月9日15時38分発行